

# ネガティブ感情が量刑判断に及ぼす影響 —座圧測定による重心移動の変化の検討—

○藤原彰紘・大杉朱美  
(福山大学人間文化学部)

## 研究の目的

量刑判断とネガティブ感情の関連は、様々な先行研究で検討されてきた (Bright & Goodman-Delahunty, 2006; 村山・三浦, 2015)。先行研究では、感情は質問紙による主観的な評価のみで検討されており、生理指標等の客観的指標は用いられていない。一方、木村他 (2020) は、ネガティブ動画視聴時の座圧測定を行い、ネガティブ感情の喚起時に重心が後方に移動すると報告している。

本研究は、ネガティブ感情が量刑判断に及ぼす影響を、着席時の重心移動を用いて測定し、検討することを目的としたものである。ここでは、事前に IAPS 画像 (The International Affective Picture System; Lang et al., 1999) を提示することで感情を操作し、量刑判断時にネガティブ感情が喚起された場合に重心が後方に傾き、量刑が厳しくなると予測した。

## 方法

**被験者** 大学生 31 名 (男性 15 名, 女性 16 名, 平均年齢 20.19 歳,  $SD = 1.69$ )。

**実験計画** 高ネガティブ群 (HN 群) と低ネガティブ群 (LN 群) からなる群と区間 (5 区間) の 2 要因混合計画。従属変数は、量刑判断の年数及び垂直中心値 (前後の重心移動) であった。

**刺激** 実際の事件を参考に作成した約 550 文字からなる犯罪シナリオを 5 つのスライドに分けた上、機械音声とともに、順に合計 100 秒提示した。

**装置** BodiTrak2 Pro (Vista Medical 社製)。

**指標** 感情状態の測定には寺崎他 (1992) の多面的感情状態尺度短縮版に緊張・弛緩に関する項目を追加した計 47 項目を使用した。座圧については、測定開始からの垂直中心値の変化量を求めた。量刑判断は、適切だと思ふ懲役の年数の回答を数値で求めた。

**手続き** 被験者は座圧シートが設置された椅子に座り、画像注視課題を行った。HN 群は HN 画像 10 枚 (火事現場等) を、LN 群は LN 画像 10 枚 (墓地等) を、10 秒ずつ注視した。その後、シナリオ課題を実施し、量刑判断を求めた。主観的感情状態を測定するため、画像注視課題前およびシナ

リオ課題後に主観的評価を求めた。

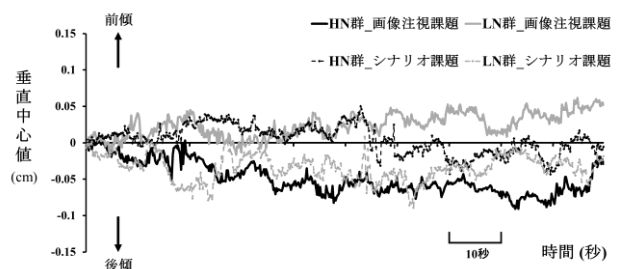
## 結果

画像注視課題時の垂直中心値の変化について、群と区間の 2 要因分散分析を実施したところ、群の主効果のみ有意であり ( $p = .044$ )、HN 群が LN 群より後方に傾いた。次に主観的評価の各得点の変化量について  $t$  検定を実施したところ、敵意 ( $p = .049$ )、驚愕 ( $p = .002$ ) については、HN 群が LN 群より有意に大きかった。

次に、シナリオ課題時の垂直中心値の変化について、同様の分析を実施したところ、主効果、交互作用ともに有意ではなかった (群;  $p = .393$ , 区間;  $p = .689$ , 交互作用;  $p = .698$ )。また量刑判断について  $t$  検定を実施したところ、各群に有意差は見られなかった (HN 群;  $M = 4.81$ , LN 群;  $M = 4.67$ ,  $p = .733$ )。量刑判断と各主観的評価の相関分析を実施したところ、非活動的快との間に有意な正の相関が見られた ( $r = .378$ )。

Figure 1

群別課題別の着席時の重心移動



## 考察

本研究では、画像注視時は木村他 (2020) と同様に HN 群で重心が後傾になったが、シナリオ課題では重心や量刑判断に差は見られなかった。非活動的快と量刑判断に相関があったことから、感情と量刑判断の関連は示唆されたが、重心移動とは関連しなかった。今後はシナリオの提示方法等を変更し、より詳細に検討する必要がある。

## 引用文献

木村 司・植山 七海・片山 順一 (2020). 座圧測定による感情状態推定の試み. 生理心理学と精神生理学, 38(3), 161-168. 他